

# キリシタン版における「分」の用法について

柴田雅生\*

## 一 はじめに

イエズス会天草学林刊の『平家物語』（一五九二年刊、以下天草版平家と称する）の末尾は、喜一検校の次の言葉で締めくくられる。

そのをことぢや。私がながいことを語りまらしたよりも、退屈もなう聞かせられたを奇特と存ずる。平家の由来わ大略この分<sup>①</sup>でござるほどに、どこでもこの物語にをいてわ、こなたもみごとあとをうたせられうほどに、重宝でござる<sup>②</sup>。

この言葉は当然ながら原平家には見られない。『天草版平家』の冒頭に記される、右馬の允の「検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ」との請いによって喜一検校が語り始めるという、天草版独自の対話形式で綴られているからである。

この部分に「分」という言葉が使われている。ここでは、「程度・状

態」といったほどの意味であるが、元々は「一部」の意であったものが、意味用法上の変化によって形式名詞となった例である。『天草版平家』ではこのほかにも「分」が十四例用いられている。ところが、原平家には「分」なる語は見えない。言わば、天草版特有語ということになるのであるが、何故この語がキリシタンたちの手になる天草版で用いられているのか、また、それは現代とどのように繋がるものと考えられるか。キリシタン版全般を通して、以下聊かの報告と考察を述べてみたいと思う。

## 二 キリシタン版における「分」の用法記述

右では『天草版平家』における喜一検校の言葉から引用したが、同書において右馬の允の言葉として使われている「分」は次の二例である。

・して宮わその分<sup>③</sup>で三井寺にござったか？（巻二124-7）

・平家はその分<sup>④</sup>にして京え上られてあったか？（巻三173-14）

前者は高倉宮の行動についての、後者は平家一門の行動についての、それぞれ喜一検校に対する促しの問いである。先の例も合わせ、いずれも「この」「その」といった指示の連体詞が上接している点が注目される。

一方、同書には、連体詞を上接しない「分」も三例見られる。原平家の代表例として百二十句本の本文を合せて示す。

・下部参ってさがし奉れとわ、をのれらが分<sup>⑤</sup>でなんととして申さうことぞ？（巻二111-5）

馬に乗りながら庭上に参るだにも奇怪なるに、下部ども参りてさがし奉れとは、汝らいかでか申べき。（巻四・信連合戦）

・大名一人わ勢をもたぬ分<sup>⑥</sup>が五百騎にわ劣りませぬ（巻二151-18）

大名一人には勢の少なき定、五百騎には劣り候はず。

(巻五・富士川)

・これわ東国、北国この三四年方々の合戦に討ちもらされて残る分と、聞こえてゐる。(巻三四一-5)

これは、東国北国、此三四年諸々の合戦に討ちもらされて残るところなり。(巻七・平家一門都落)

これらも形式名詞としての用法であり、最後の例のように対応する語句「ところ」が想定できるものもある。しかし、『日葡辞書』(一六〇三-四年刊)においては、「分」と「この分」「その分」は別に立項されており、「この分」「その分」は別語と認識されていた可能性がある。

・ Bun. ズン (分) *vaguru. l. vacatcu.* (分くる。または、分つ) 分割, 部分, 割り前などの意。『また, 別のものであること, または, 違ったものであること。』*Soreua bunde gozarru.* (それは分でござる) それは別である, または, もともととはかのものである。『また, 能力, または, 力量。例, *Bunni, l. Bunzaini su-quita furumai.* (分に, 分際に過ぎた振舞) 催す人の力量を越えた招宴。

・ *Conobun. l. cono bunni. コノズン。* または, *コノズンニ* (この分。または, この分に) このような具合に, あるいは, かように。  
・ *Sonobun. ソノズン* (その分) 副詞。そんな具合に。  
このほかにも「分に」を副詞として立項する。

・ *Bunni. ズンニ* (分に) 副詞。それぞれに, 個々に, または, 別に, 違って。

「分」の説明中にも「分に」の用法説明に近似する記述が見えるため、別項目であることの意味はそれほど大きなものではないかもしれない。

しかし、「その分」に副詞としての用法を認めている点は注目してよいと考える。ロドリゲス『日本大文典』(一六〇八年刊)でも、「その分」は副詞の項目中に列挙される。

・ *Mottomo* (尤も)。十分な理由をもって。

*Guenimo* (げにも)。同上。*Gueni* (げに)。*Guenigueni sōmo arōzu* (げにげにさうもあらうず)。*Sō* (さう)。*Massō* (真ッ然う)。*Maccō* (真ッ斯う)。*Sayōni* (左様に)。*Sonobun* (その分)。<sup>(3)</sup> その通りである。

*Guiōy* (御意)。*Vōxe* (仰せ)。<sup>(2)</sup> *Gojō* (御説)。<sup>(2)</sup> *No gotoqu* (の如く)。<sup>(2)</sup> 仰せの通りである。

(第一巻・副詞—副詞の種類となる種類と意義に就いて—肯定「この分」については次のような例文中に記載が見えている。

・ 〇附則三

〇 *Cayōni mōsu* (かやうに申す)。*Conobunni cagu* (この分に書く)。<sup>(3)</sup> このやうに書く。*Xixite nochi cayeru coto naxi* (死して後帰ることなし), 等。

(第二巻・同格構成—主格語と動詞に就いて)  
この他「この分」について「*Conobunni coso cacaruru mono nari.* (この分にごを書くものなり)。(このやうに書かれるべきものである)。(第一巻・動詞)という用例も見える。単独の名詞としての「分」と、「この分」「その分」の間に何かしらの意味・用法上の違いが認められていたことは確かなことであろう。それを、『天草版平家』を例として検証してみることとする。

前掲の用例以外の『天草版平家』の「分」の用例は次のようである。同様に、原平家と合わせて記す。

- ・この分<sup>①</sup>で都にいまらするならば、(巻二103-4)
- かくて都にあるならば(巻一・祇王出家)
- ・げにもと仰せられて、その分<sup>②</sup>に出立たせられ、市女笠を召させられて出させらるれば、(巻二109-2)
- げにもとて、重ねたる御衣に、いちべがさをぞ召されける。(巻四・信連合戦)
- ・その分<sup>③</sup>でも位は四位でいられたが、つねわ三位に心をつけて、(巻二140-11)
- と、つかまつり、昇殿したりけるとぞ聞こえし。四位にてしばらく候けるが、常に三位に心をかけつゝ、(巻四・鶴)
- ・その分<sup>④</sup>にして平家も重ねとゆう者を頼うで四国の地え渡られたが、(巻三204-14)
- 平家の小船に乗り給へる由を聞ひて、安芸、周防、長門三が国の材木積みたる船ども百余艘点じ奉る。これによりて讃岐の屋島にうちわたり給ふ。(巻八・柳の浦落)
- ・牛飼この分<sup>⑤</sup>で悪しからうず…仲直りをしようと思つて、さうでござる…手がたにとりつかせられいと申したれば、(巻三208-3)
- 牛飼悪しかりなんとや思ひけん、それに候ふ手がたにとりつかせ給へと申せば、(巻八・木曾猫間対面)
- ・さうして木曾もこの分<sup>⑥</sup>でわるまいと思つたによつて、(巻四226-16)
- その頃木曾追伐のために、東国よりうちて上ると聞こえしかば、木曾は西国へ早馬をたてゝ、(巻八・義経熱田陣)
- ・これえ参れとわ仰せつかわされいと、言われたによつて、その分<sup>⑦</sup>に言いやられたれども、(巻四227-4)

たゞ兜を脱ぎ、弓をもはづして降人に参り給へと申されければ、大殿、此やうを都への給ひ上せたりけれ共、(巻八・義経熱田陣)

・まことにその分<sup>⑧</sup>でござる(巻四243-24)

これまで来たれるなりとの給へば、兼平も、瀬田にていかにもなるべふ候ひつるが、(巻九・兼平)

・その分<sup>⑨</sup>にして引き渡しませしめてのち、(巻四350-23)

六条を東へ、河原を渡されてのち、九郎判官の六条堀川の宿所に入れ奉る。(巻十一・一門大路渡)

最初の例は原平家にかなり近似した本文ではあるが、それ以外は、原平家を規準とするならば、いずれも付け加えられた表現の部分と考えられる用例ばかりである。その時に、「この分」「その分」に下接する要素は「で」「でも」「でわ」「に」「にして」の五種類に限定される。次節に述べるように下接する要素はこれらだけではないが、いずれにしても、「分」単独の用法(それが形式名詞としての用法であっても)とは異質なものとなっていることは注目してよいであろう。これだけでも、『日葡辞書』『日本大文典』の記述には蓋然性があると認められるが、用例数の乏しさもあるため、次節ではキリシタン版全体を通しての分析を加えてみようと思う。

### 三 キリシタン版における「この分」「その分」の用法

まずはじめに、キリシタン版全体に見られる「この分」「その分」の用例を下接語により整理すると表1のようになる。合せて「分」単独の用例も表2に示す。

表1	計	なり	ぢゃ	に	で	動詞	その他
サントスの御作業	16/29	3/11		4/3		8/12	1/3
どちらいなきりしたん	0/4	0/3				0/1	
ヒイデスの導師	0/1						0/1
平家物語	4/8		1/1	0/5	3/2		
エソポのハブラス	3/8	1/0	1/2	1/4		0/2	
コンテムツスモンデ	1/5	0/4		1/0		0/1	
ぎやどべかどる	2/5	0/2		0/1		1/2	1/0
どちらいなきりしたん	0/4	0/3				0/1	
こんてむつすむん地	0/3	0/2		0/1			
さんげろく	3/10		1/6	2/1		0/3	
合計	29/77	4/25	3/9	8/15	3/2	9/22	2/4

※／の上段が「この分」の、下段が「その分」の用例数。「に」は「にして」を含む。

表2	計	なり	ぢゃ	に	で	動詞	その他
サントスの御作業	1						1
どちらいなきりしたん	1	1					
ヒイデスの導師	7	1					6
平家物語	3				1		2
コンテムツスモンデ	5						5
さるばとるむんぢ	2						2
ぎやどべかどる	3						3
どちらいなきりしたん	1	1					
こんてむつすむん地	2						2
さんげろく	4						4
合計	29	3			1		25

それぞれの分類の用例を示す。

なり

・其故ハ、生得人の大切といふハ、其相手の好悪に応じて、深き浅きの隔もある物也、是大切の道に限らず、恐れと頼母敷事、又ハ科を憎む事等、皆以て其分也（ぎやどべかどる 上64ウ2）

ぢゃ

・また、氣に合わぬ者の悪いことを聞き及ぶ時は、必ずその分ぢゃと存じ、口でも申しまらす。（さんげろく50+16）

に

・さるによって御下知より外に、我は万民の言葉にかかはらずと。悪守護この分に情識ならば、猛き獣に喰らはすべしとおどし申せども、少しも恐れ給ふ体なければ、さらば殺し奉らんと申すなり。

（サントスの御作業サンポリカルポのマルチリヨのこと）

で

・牛飼この分でわ悪しからうず…仲直りをしようと思うて、さうでござる…手がたにとりつかせられい」と申したれば、

（平家物語208+3）

動詞

・シャント所の人々にその分申さるれば、各々大きに喜うで、

（エソポ426+15）

その他とは、

・これ即ちデウスのポロビデンシヤと見えたり。その故は、サント故郷を出で給ふ時のオラシヨに、その分御祈誓あればなり。

（サントスの御作業サンクレメンテのマルチリヨのこと）

・此分悪人ハ常に悲むべしといへども、その時の後悔ハ先にたゝず、

(ぎやどべかどる 上37オ10)

などの節に係ってゆく場合が多いが、中には副助詞「ばかり」や助動詞「たり」を下接する例が、わずかであるが見られる。

ばかり

・されどもローマの御行ひに違ひ給ふまじきとの、その分ばかりを勤め給ふ。しかるにキリシタンの宗門をば洛外に一在所を構へさせられて置き給ふ。

(サントスの御作業 サンタエウゼニヤの御作業)

たり

・○三つには、アンジョも叶ひ給ふべきにせよ、その分たりとも、アンジョより人間を扶けらるること似合はず、その故は御扶けの恩は他に殊に勝れたるご恩賞なれば、デウスより受け奉ること、デウスのご名誉に相当したる儀なり。

(ヒイデスの導師・巻第三―第四)

『ヒイデスの導師』にのみ見られる用例であるが、「なり」「ぢゃ」に類する用法と考えられる。このように、指定表現に連なる用法が「この分」「その分」の特徴であり、全体の四割近くを占めている。

これに対して、単独の名詞としての用法においては、下接語の種類はかなり異なるものとなる。比較的多数を占めるのが助詞「が」「を」「は」などである。例えば、『ヒイデスの導師』においては、

・鳥、獣の色身に当る分は大方斯くの如くなり。(巻の一8二)

・先づエワンゼリヨに当る分を論ずるに、第一には御主ゼズ キリシトゴパシヨンの前に告げ給ふことなり。(巻第二第二十五)

などが見え、「この分」「その分」が見られない『さるばとるむんぢ』にも、

・其不足なる分をふるがたうりよにてうくべきなり

という用例が見て取れる。いわば、文における句を構成している用法が中心と考えられる。その点では、「こと」や「もの」などの一般の形式名詞となんら変わらない用法と言ってよいであろう。むしろ、「この分」「その分」に何らかの特徴を見出だすべきである。

翻って、「この分」「その分」の用法を見るに、注意が必要なのは助詞「に」が下接する場合である。一番用例数の多い『サントスの御作業』中には次のような例が見える。

・サントのこの分書き給ふのみならず、サンイレネオといふマルチルもこの分に書き給ふなり。(サントイグナチオの御作業)

『日葡辞書』にも記すように、「に」の有無が決定的な違いをもたらしているとは考えがたい例である。したがって、下接する「に」にさらに続く要素が重要になる。それらを見るに、

「に」ナシ

いたす(致) 2 いふ(言) 3 おもふ(思) かく(書) こころう(心得) したたむ(認) す(為) 9 つとむる(勤) とふ(問) のたまふ(宣) 5 まうす(申) 2 めす(召)

「に」アリ

おこなふ(行) おぼしめす(思召) かく(書) そうす(奏) つかまつる なげく(嘆) はからふ(計) まかりいる(罷入) ゐる

(居) (用例数の明示がない動詞は一例のみ)

となる。「に」を伴わない動詞には、「のたまふ」「いふ」「こころう」などの言語活動や認識に関わる動詞や、「す」「いたす」などの形式的な意味の動詞が目につく。一方、「に」を伴う場合には、「ゐる」「はからふ」などのように特別な意味を有するとは思われない動詞が見えると同時に、

「かく」「そうす」などといった「に」を伴わない用法と同等の動詞も見えている。用例数で言えば、「に」を伴わない場合の方が多い。「に」を伴わない場合には、「上聞なす」「御祈誓あり」「約束す」のような、動詞句やサ変動詞を下接する用例も見られる。これらも言語活動や認識に関する表現である。したがって、助詞「に」の有無による意味用法の差異はほとんどなかったと見てよいと考えられる。その点からも、『日葡辞書』や『日本大文典』にも記すように、副詞化した用法と見ることができるであろう。

#### 四 キリシタン版における「この分」「その分」の表現

現行の辞書類に挙げられている「この分」「その分」の用例を見ると、「では」「なら(ば)」などを下接し、条件表現となっている場合が多い。これは、現代だけでなく中世においても同様の傾向が見て取れる。例えば、虎明本狂言台本には「この分」十七例、「その分」二十三例を見出すことができるが、その約半数の十九例は条件表現である。

- ・さりながら、此分では身共が負けじやあらふな(鼻取相撲)
  - ・其分ならば氣遣ひな召されそ(河原太郎)
- 中には、

・しかとそのぶんじやな(清水)

・一日くゝと今までその分でござる(比丘貞)

のように、キリシタン版と同様、指定表現に連なる用例(五例)も見られるが、むしろ

・其分心得候へく(唐相撲)

という同じ表現が合計五例見え、成句のように使用されていたのではな

いかと推測されるように、その内実はキリシタン版とはかなり異なるようである。

同様の視点でキリシタン版に見られる「この分」と「その分」の用例を見るに、条件表現を伴う用例が少ないことに気付く。先に示した表1を見るだけでも予想できたことであるが、「この分」「その分」のみで明らかに条件を示すと考えられるのは次の七例だけである。

- ・マルチリヨのはじめより二十八年の間はその分にてあるべければ、よくよく覚悟し給へとの御声聞えたるものなり。

(サントスの御作業・サンクレメンテのマルチリヨのこと)

- ・弟 その分ならば病者につかへ、死骸を送り、食物をととのへ、振舞ひの営み給仕し、その他色体の辛労にあたる所作はたとひせずして叶はざる所作なりともつとむる事叶ふまじきや。

(どちらなきりしたん)

- ・〇三つには、アンジョも叶ひ給ふべきにせよ、その分たりとも、アンジョより人間を扶けらるること似合はず、その故は御扶けのご恩は他に殊に勝れたるご恩賞なれば、デウスより受け奉ること、デウスのご名誉に相当したる儀なり。

(ヒイデスの導師巻第三―第四)

- ・牛飼この分でわ悪しからうず…仲直りをしようと思つて、さうでござる…手がたにとりつかせられいと申したれば、

(平家物語巻三208―3)

- ・さうして木曾わこの分でわなるまいと思つたによつて、

(同右巻四226―16)

- ・某は既にこの分でござれば、御分別あれかし。(エソポ411―21)

- ・是其分なりといへども、デウス又御奉公の道を初むる人にみどり

この乳味を含むがごとく甘露の味ひを含ませ給ひ、後にハ鹿食になれさせ給ふ者也（ぎやどべかどる上70ウ6）

あるいは次のような用例を含めてもよいかもしれない。

・この儀もっともなりと同心して、我道具をととのゆる間、又三日置き、三日の後ビルゼンを召し出だしその分問はるれば、ビルゼン答へて宣はく、

（サントスの御作業・サンタカテリナのマルチリヨの様体）

・悪逆の道につかれ、嶮き道に羈され、御主を知る事なしといふべし、此分悪人ハ常に悲むべしといへども、その時の後悔ハ先にたゞず、（ぎやどべかどる上37オ10）

しかし、それとてもさほど用例数は多くなく、条件表現のみをとっても、狂言台本とキリシタン版ではかなり異質な用法となっているのである。

ほぼ同時期の資料であるのに、何故にこのような違いが生じているのか。一つ氣に留めておきたいのは、『エソポのハブラス』の国字本においては「分」が一例も見えないことである。<sup>(6)</sup> エソポには計十一例の「分」が見られるが、すべて「この分」か「その分」のいずれかである。このうち、国字本に対応する説話部分のある用例は七例であり、そのいずれもが次のように対応する表現を欠いている。

・「この儀もっともぢや」とあって、シャント所の人々にその分申さるれば、各々大きに喜うで、エソポを召し出だすに、

（426-15）

・「げにも」とて、その日に臨んで儀定の庭に召出しければ、

・蟻、「げにげにその分ぢや」夏・秋歌い遊ばれたごとく、今も秘曲を尽くされてよからうず」とて、散々に嘲り少しの食を取らせに戻した。（465-18）

蟻申けるは、「今とてもなど歌ひ給はぬぞ。謡長じてはつゐに舞とこそは承はれ。いやしき餌食をもとめて、何にかはし給ふべき」とて、穴に入ぬ。

このことは、最初に触れた『天草版平家』と原平家との関係にも通ずるものがあるのかもしれない。ひとまずはいわゆる口語体と文語体の違いに基くと考えられるであろう。『エソポのハブラス』においては会話部分に偏ること（計七例）もこれを支持すると考えられる。しかし、その際においても口語性が強いとされる狂言台本との関わりはどのように捉えたらよいのかという問題が残る。

資料調査が充分ではない段階での憶測を敢えて述べるならば、キリシタン版における「この分」「その分」の用法が、「なり」や「ぢや」といった指定の表現に偏りを見せることに何らかの意味があったとは考えられないだろうか。すなわち、「この分」「その分」という「程度・状態」を示す語句は、指定の表現と組み合わせられて判断や評価を示す表現として使用されている。判断や評価を示す表現は狂言台本にも見られるが、その用例はさほど多くはない。それがキリシタン版では拡大解釈され、当時の日本語では一般的ではない用法を中心として記述されるようになったという道筋である。その背景には、あるいは「分」という語の文化的な意味を考えてよいかもしれない。「分」は「分際」「分別」などの身の処し方に連なる語句とも関連し、「分」を語構成要素に持つ語はキリシタン版にも散見する。キリシタンたちが「分」を布教に際しての重要な語句として捉えていたことが、その後押しをしたのではないか。けれども、それだけでは、なぜキリシタン版において条件表現が少ないのかという問いには答えられない。「分」のみならず、一字漢語全体の意味用法の変化の問題としても捉える必要があるだろう。

## 五 おわりに

『日本国語大辞典(第二版)』において、「この分」「その分」の初出例はともに世阿弥の著作である。

・ かやうなる物まねは、殊に／＼、橋懸りの遠見の風体、声聞意曲を奮いて、出で来る装いなるべし。此分を心得て、言葉を尋ね、品を求めて、作書すべし。(三道)

・ 為手も見所も、その分／＼の心眼也。(拾玉得花)<sup>(?)</sup>

世阿弥の著作にはこの他にも「分」の使用を比較的多数見ることが出来る。キリシタンたちが「舞の本」に通曉していたことは、ロドリゲス『日本小文典』にも詳しい<sup>(8)</sup>。キリシタン版の「分」も謡曲に関連すると思われる部分が多々見られる。「心得」を下接する場合がその典型である。したがって、狂言台本との類似があってもしかるべきではあるが、今回の調査の結果ではそれに反するものとなった。

「分」は遑れば「部分」の意であり、それに由来する多様な用法を持つ。今回主として扱った「この分」「その分」はその一部分でしかない。しかし、その中において、キリシタン版には他には見出しがたい用法を指摘し、それが明確な意識のもとに使用されていることを確認することができた。今後は、この用法が中世という時代においてどのような位置付けられるのか、抄物等も含めた幅広い調査によって明らかにしていきたい。それと同時に、文化史的な見地からの検討も加え、一字漢語の多様な用法を裏付けていきたいと思う。

## 注

- (1) ローマ字を漢字仮名に翻字して記す。翻字のルールは底本とした『天草版平家物語 対照本文及び総索引』に準拠したが、縦組のため句読点は「、」と「。」に改めた。以下、ローマ字本のキリシタン版においては同じ方針で扱うこととする。
- (2) 天草版の底本については、覚一別本や百二十句本が候補に挙げられているが、本稿で取り扱う用例の範囲では大きな違いが認められないため、百二十句本を基本として考えていくこととする。
- (3) このほかにも、『易林本節用集』言語部においても「此(中略)一分」を掲出する。
- (4) イエズ会の出版したキリシタン版においては『スピリツアル修行』が未調査であるが、索引によれば「ロザイロの観念」に「汝もオラシヨの時はその分すべし」(29オ)という用例が見られる。
- (5) 和泉流『狂言六義』においてもほぼ同様の結果が得られる。
- (6) 大塚光信『キリシタン版エソポのハブラス私注』(一九八三年三月、臨川書店) 所収の古活字版による。
- (7) 『日本古典文学大系65 歌論集 能楽論集』(一九六一年九月、岩波書店) による。
- (8) 池上岑夫訳『ロドリゲス著日本小文典上・下』(一九九三年七月・八月、岩波文庫) による。

使用した資料・索引

- 土井忠生、森田武、長南実編『邦訳日葡辞書』(一九八〇年五月、岩波書店)
- 土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』(一九五五年三月、三省堂)
- 福島邦道『サントスの御作業 翻字・研究篇』(一九七九年二月、勉誠社)
- 尾原悟編『キリシタン文学双書 ヒイデスの導師』(一九九五年一月、教文館)
- 江口正弘『天草版平家物語 対照本文及び総索引』(一九八六年十一月、明治書院)
- 大塚光信・来田隆編『エソポのハブラス 本文と総索引』(一九九九年二月、清文堂)
- 大塚光信『キリシタン版エソポのハブラス私注』(一九八三年三月、臨川書店)
- 松岡汎司『慶長三年耶蘇会版サルバトル・ムンデの本文と索引』(『上智大文学論集』六号、一九七三年五月)
- 大塚光信『コリヤードさんげろく私注』(一九八五年一〇月、臨川書店)
- 高橋貞一校訂『平家物語 百二十句本』(一九七三年一〇月、思文閣)